

■肢体不自由のある子どもたちへの実践事例

マルチメディアDAISY図書の活用で 子どもたちの読書の世界を広げる

東京都立八王子東特別支援学校
谷本 式慶・須田 暢子

本校は、肢体不自由の子どもが通う特別支援学校です。2012年度より、わいわい文庫利用研究校となりました。

マルチメディアDAISY図書は、貸与されたタブレット端末（iPad 1台、iPod10台）を活用しています。それに加えて、校内のiPad 9台にもマルチメディアDAISY図書を導入し、活用しています。

昨年度までの取り組み

- ①マルチメディアDAISY図書は、学校の中ではどのように活用できるか
- ②マルチメディアDAISY図書周知への課題と取り組み

①については、上肢の操作性と見え方に困難さを抱えており、紙媒体の本を読むことに心身ともにストレスを感じていた子どもたちが、マルチメディアDAISY図書を使用することで、本を読むことのストレスが軽減され、読書の楽しさを味わったり、家での予習や授業での学習に意欲的に取り組むようになったりしました。

また、個別学習で子どもたちの実態や状況に合わせて、色・文字の大きさ、スピードなどカスタマイズしながら活用することで学習効果を高めることができ、マルチメディアDAISY図書が読書、教科学習、余暇等の活用において有効であることを確認することができました。

②については、活用拡大の周知が難しいという課題の原因を探るべく実施した教員向けの校内アンケートをもとに、環境改善や教員向けの講習会などを実施し、少しずつですが新たな使用者や貸出数を増やすことができました。

今年度の取り組み

（1）前年度までの実践をふまえて

上述のように、これまでさまざまな形でマルチメディアDAISY図書の活用方法を模索したり、周知の方法を探ったりしてきましたが、やはり実際使用している子どもたちや教員が限られている現状があります。では、なぜ使用者が限られてしまうのでしょうか。

昨年度実施した教員向けのマルチメディアDAISY図書校内アンケートにおいて、教員から以下のような声が挙げられていました。

- ・デイジー図書はなんとなく知っているが、どのように使えばいいのかわからない。
- ・どのような児童・生徒に有効なのかわからない。
- ・具体的にどのように使えばいいのかわからない。

そして、実際に、有効ですぐ使い始められる子どもたちと、あまり適さず使用をあきらめてしまう子どもたちに分かれてきます。その違いとは何なのか、マルチメディアDAISY図書が適しているのは一体どのような子どもなのかを、子どもたちの実態と読書形態の関係からみていきます。

(2) 子どもたちの実態と読書形態

本校に通う子どもたちは、肢体不自由といっても実態はさまざまです。その多様性や発達段階などの違いがマルチメディアDAISY図書の使用における違いにかかわっているのではないかと考え、詳しく見ていくことにしました。

①本導入期の子どもたち

まだ本に触れる経験が浅い子どもは、学校で教員に絵本を読んでもらうことで、教員の声に反応して本のほうを見

ようしたり、自分でも手に取ってページをめくったり、教員のまねをしようしたり、と少しずつ本に興味をもっていきます。しかし、まだ大人の働きかけが必要で、一人で本を楽しむには積み重ねが必要な段階です。



写真1

このような子どもたちにマルチメディアDAISY図書を使用したいと考えた場合、いつも教員が読み聞かせているなじみのある絵本であれば、興味をもって見ていただける場合もあります。

しかし、本の世界に入りたての場合には、知らない人の声だったり、ページをめくる動きがなかったり、絵が静止して文字も映し出されていたりというマルチメディアDAISY図書に対して、見続けたら反応したりということはなかなか難しいという実態があります。そのため、画面に注目できない、注目できても何を映し出されているかが理解できないために持続しないなどといったことが起こります。本という

新しい世界に興味をもつためには、まずは信頼関係にある大人が、見ることを促したり、一人ひとりのペースに合わせて読み聞かせをしたりという積み重ねが必要だと思われます。

②障害特性や発達段階に合わせた配慮を必要とする子どもたち

子どもたちの多くはさまざまな障害を併せ有しており、一人ひとりの障害の特性などに応じた配慮が必要です。視覚障害がある場合、同じDAISY図書でも、パソコンやタブレット端末よりも、操作ボタンの凸凹があるDAISY再生機器（プレクストークなど）を使用するほうが適していることがあります。

また、発達段階的に物に意識を向けて注目する、注視したり、追視したりすることが課題となっている子どもたちにとっては、光や音が出る本、触ったりにおいを感じたり五感で楽しめるしかけ絵本などのほうがより実態に適しているといえます。



写真2

③一人で本を楽しむことができる子ども、それを目指す子ども

自分で文字を読んで理解できる子どもたちでは、紙媒体の本を楽しめる場合と、それが困難な場合とがあります。困難な場合というのは、文字の大きさや行間、背景色が自分に合わずに読み飛ばしが発生する、本のページをめくったり押さえ続けたりすることが難しいなどです。そういった場合には、まさにマルチメディアDAISY図書が適切であるといえます。

マルチメディアDAISY図書には、以下のような特徴があります。

- ・自分の見やすいように文字の大きさや背景色を設定できる
- ・読んでいる個所にハイライトがつく
- ・人の声で読み上げられる
- ・タブレット端末でも再生でき、操作が簡単である

これらの特徴は、上記のように紙の本を読みたくてもさまざまな理由から読むことをあきらめていた場合には、とても有効なツールであるといえます。

簡単な本は自分で楽しむことができる、文字で全てを理解はできないが音声であればより深い内容を理解できる、という子どもたちにおいては、マルチメディアDAISY図書により、新たな読書の世界が広がる可能性があります。



写真 3



写真 4



写真 5

まだ自分一人では読み切れず、教員に読んでもらっていた本でも、普段からなじみのある本であれば画面に注目

してマルチメディアDAISY図書でお話を楽しむことができます。

つまり、今までは大人との関わりの中で本を楽しんでいた子どもたちが、マルチメディアDAISY図書を使用することにより、一人で読書を楽しむ練習ができるということになります。これは自習で読書、余暇で読書という形で、学習面においても生活面においても子どもたちの自立を促すきっかけとなり、子どもたちの世界を大きく広げることにつながります。

しかし、このような子どもたちにとっても、マルチメディアDAISY図書では不十分であるという一面があります。マルチメディアDAISY図書の作品数の課題です。

マルチメディアDAISY図書は、人の声を吹き込んで制作するというその地道な製作過程から、一つの作品が出来上がるまでとてつもなく膨大な時間がかかります。私たちはその丁寧な作業の末の恩恵にあずかっているわけですが、そこには「子どもたちの読みたい本がマルチメディアDAISY図書の中に見つからない」という新たな課題が起こってきています。

伊藤忠記念財団は、私たちの希望やニーズを聞き取り、それらに合わせて作品製作を進めてくださっていますが、でき上がるまでにはしばらく時間がかかり、「今すぐ本を読みたい」という

希望に沿えないことがあります。

その解決策の一つに、電子図書リーダーの活用があります。読み上げ機能が必ずしも必要ではない子どもで、電子図書リーダーに読みたい作品を発見できる場合に有効です。



写真 6

(3) まとめ

ここまで、本校の子どもたちの実態と、それぞれの読書形態との関係についてみてきました。そこからみえてきたことは、

- ・子どもたち一人ひとりにあった読書形態は、その実態からさまざまである
 - ・子どもたち一人ひとりの実態に合った読書形態を検討し、提供していく必要がある
- ということです。

このことは、肢体不自由のある子どもたち一人ひとりに個別指導計画を作成して授業などを行っている私たちにとっては、あまりにも当たり前の結果

である一方、読書に関してそのように考えていただろうかという問いでもありと受け止めています。

マルチメディアDAISY図書が有効だと考えられる子どもたちには、その人数の多少にかかわらず選択肢の一つとして検討することが必要であるし、他の読書形態が有効だと考えられる場合にも、同様に適切に検討していく必要があるといえます。

今回例として挙げた子どもたちの実態や、それに適している読書形態の分類はまだまだ不十分なものであり、大まかすぎて網羅できていない部分も多々あることと思いますが、「子どもたち一人ひとりの実態に合った読書形態を検討し、提供していく」ことに向けて、今後取り組んでいきたいと考えています。

そして、マルチメディアDAISY図書の特性から、特別支援学校に加えて特別支援学級や通常学級へのさらなる広がりを目指しています。

マルチメディアDAISY図書によって読む楽しさを得ることができた児童・生徒や、その変容によって笑顔になった保護者・教員などとともに、製作にかかわるすべての方々に感謝申し上げます。

今後も、より多くの方がマルチメディアDAISY図書を知り、さらに活用が進んでいくことを願っています。